降灰予測50㌢超　直下地震、土石流警戒

大正級 対岸も深刻

桜島の爆発は年間885回(2012年)に上り、1日に2回超の計算になる。噴煙を上げる光景は日常と化し、ややもすると注意は降灰の行き先だけにとどまる。鹿児島県内の115事業所から回答を得たアンケート結果からも、大噴火やその具体的な対策をなかなかイメージできていない姿が浮び上がる。桜島で今、大正級の大噴火が起きたら対岸はどうなるのか―。東日本大震災以降、大噴火対策に乗り出した内閣府の検討会資料や、大正噴火時の地震と同じ想定でシミュレーションした1997年の鹿児島県の報告書などを基に、災害リスクをまとめた。

事業所アンケートに寄せて

東日本大震災では「想定外」なる言葉がはやった。原発はさておき、確かに見報津波は奈良時代の話だ。しかし桜島は百年前、わが国で20世紀最大の噴火を起こしている。来るべき桜島大噴火で「想定外」なる言い訳を使うことは許されない。

では「想定外」に備えているであろうか、アンケートの結果を拾い見ると、桜島の大噴火が近いうちに起こることも、大きな影響があるだろうことも認識しているようだが、対応策を考えているところは少ない。

ローマのカエサルは「多くの人は見たいと欲する現実しか見ていない」と言葉を吐いたという。まさに「考えたくないものは考えない」である。防災はおろか任せた風潮があるようだ。しかし東日本大震災で見たように、広域同時多発災害では行政の力には限界がある。「自分の命は自分で守る」の心がけが大切だ。

もっと想像力を働かせて「想定外」を想定しなければ、もっと具体的に想像がつく。地震と噴火は、密接に関連している。これまで「調査研究」という項目の欄が下に小律続、広域にわたる大量の軽石・火山灰の降下は